

『狙撃手』

彼女の名前はボルメリア・ランキン。

またの名を『城砦落とし』。

歴戦の騎士らしからぬ歳と風貌、その愚直なまでな戦い方で勇名を馳せている。

彼女のような『善』の有名なあまり裏街道など通らない。

『悪』の支配者がかけた賞金目当ての挑戦者、お高くとまった騎士に対するやつかみが隠せない者、

若く美しい娘ならばちよっかいをかけねばならないと信じている連中。それらの相手をするのが億劫だからだ。

もちろん、彼女のように姿形が知れ渡っている者ならば、何処を通ろうと同じだ。

だが表街道と違い裏街道は、文字通り裏稼業に身をやつす連中が多い。トラブルを避けるなら、こんなところは通らない。

彼女が裏街道を通る理由は極めて簡単だ。ただ単に近道だからである。愚直というのはこのこと。

目的を決めればそれに向かって脇目も振らずに真っ直ぐ進むだけなのだ。

それが無用のトラブルを起こす原因である事も解っている。だが彼女はそれを気にした事はなかった。

気にする必要もなかった。鬱陶しくはあるが彼女にとって致命的な事にはなりえないからだ。

裏街道の自然発生的な宿場町はそういったトラブルを温床だ。だが彼女はそこで足を止めた。

保存食以外の食事をとる機会は少ない。善なる軍神の恩寵により高速治癒能力を持つが霞みを食べている訳ではない。

神の眷属であり人間の姿をしていながら人間ではない存在と言っても、食わねば生きていけないのだ。

町に入った瞬間から、たむろしていたゴロツキたちは彼女に注目した。

フードとマントで姿を隠しているが、小柄な体つきは誤魔化しようがない。

目端の効くものならば、そのフードとマントに隠された彼女と彼女の武装に目をつけるだろう。

余りにも堂々と入ってくるので呆気に取られたが、しかし誰もがどうやって彼女に手を出すか考えている様子だった。

彼女としてそれに気づかないはずがない。だがそれら一切を無視して一番最初に目に付いた酒場に入っていく。

店の中には昼間だというのに十人余りの男達が管を巻いていた。数人でカードゲームの賭けに興じるもの。

一日中飲んでいる酒が体から抜けきれず、居汚くうたた寝をしているもの。口論の為の口論をしているもの。

怪しげな取引をしているもの。皆それぞれだったが、彼女が店に入った途端、

その場に似つかわしくない清冽な雰囲気皆、沈黙した。店の外には、彼女を追ってやってきた連中が数人たむろしているようだ。

店の主はあからさまに嫌な顔をした。彼女は武装している。

若い娘が一人でこんなところにノコノコと入ってくるという事は、よほどの世間知らずか、あるいは多少腕に自信があるのか。

何にせよ、トラブルが起きた場合、店の中が荒らされる事だけは確かだ。

こういう客にはお引取りを願うものだ。

しかしフードをとった彼女の清冽な藍色の瞳に見詰められた時、その威圧感から腰砕けになってしまった。

「これでおすすみを頼む」

カウンターに金貨一枚が出される。彼女の一本にまとめられた三つ編みと同じ金色だ。

乳白色の肌は高貴な生まれである事を示している。年の頃は十五・六。人買いに売れば高い値がつくだろう。

だが、誰もその気になれなかった。周囲を払う彼女の圧倒的な存在感が、その場にいる者たちに喉の渴きを覚えさせた。誰もが息をひそめて誰かの動きを見守っている。

主人だけはこの緊張感の中でも動かなければならない。

奥に引っ込んで彼の自慢の料理を、この清く厳しい雰囲気少女に振る舞わなければならぬのだ。

「けっ。何をビビッてんだよ。相手はたかが小娘じゃねーか」

男は人間にしては大柄な方だ。腕の太さや胸板の厚さから推し量れば、彼女を羽交い絞めする事など簡単にできるだろう。無神経な質なのか、それともよほど自分に自信があるのか。男はカウンター席に座る彼女の背後から近寄った。

「お嬢ちゃん。こんなところで一人でいるなんて危ないなあ。どうだい、おじちゃんと一緒に遊ばないか？」

「断る。先を急ぐので」

にべもない返事でも男は怯まなかった。相手の返事にかまうつもりはないのだ。背後から羽交い絞めにするつもりなのだから。

だが後一步というところで彼女が振り向いた。同時に男は自分が気絶したという事さえ解らず倒れていた。

目も止まらぬ速さで、彼女は手にした大剣で男を打ち据えたのだ。

あつと言う間のできごとだった。男達はこれに完全に飲まれた。

彼女はそんな男達を見回す事もせず、何もなかったかのように席についた。

料理を手に戻ってきた店の主人は、床に倒れている男の姿に驚いたが、すぐに失神しているだけであると気づいて安堵した。

「すまねこ」

彼女の謝罪の言葉に主人は意外な顔をしたが、何も言わずに下がった。

彼女の静かな食事が始まる。同時にやや緊張感から解放された男達が、店の端々で囁き始める。

あれは噂に聞く『城砦落とし』じゃないのか？

まさか。あんな小娘が？

金髪的一本三つ編みに乳白色の肌。おっそろしく澄んだ藍色の瞳に、体に合わない大剣。これで浮遊盾が揃えば噂通りじゃないか。

でもよお・・・

そういえばここから二日ほど行ったところにバラウダとかいう魔法使いの塔があるな。

人間やらエルフやらドワーフやらの子供ばかり集めて、反吐の出るような実験をしているんだとよ。

じゃ、そこへいく途中の腹ごしらえて事かよ。騎士が魔法使いの塔に単身攻めに行くなんて聞いた事がないぜ。

だから、『城砦落とし』なんだろう？

噂に聞く彼女の手並みを目の当たりにして恐れると同時に、誰もが彼女の目的を推察して蔑んだ笑みを浮かべる。

彼女はいつでも何処でも単身で真正面から敵地に乗り込む。その愚直なやり方は嘲笑の的だった。

しかしそれでも彼女を敵に回して陥落しなかった城は存在しなかった。

恐れと同時に侮蔑。強力な呪文はともかく、陰險な用意周到な罠が張り巡らされているに決まっている魔法使いの塔に一人で立ち向かうなど正気の沙汰ではない。

だが男達の嘲笑の中で一人だけ、恐れも嘲笑いもせず彼女を見詰めている視線があった。弓矢を携えたエルフの若者といった姿だが、人間に比べれば遥かに長命な彼らの年齢を考えると、ここににいる者たち全ての歳を合わせても彼には届かないだろう。

若者は目深に被った帽子の隙間から、じつとポルメリアを観察している。そして懐から出した羊皮紙の尋ね書きに目を通した。彼女の風貌はそこに書いてある通りだ。もし人違いでも彼女の装備を売ればかなりの金を稼ぐ事ができる。

若者は目の動きだけでそう考えをまとめると、あとは何でもない風に自分の酒を飲んだ。

「し亭主、騒がせたな」

ポルメリアは食事が終わると更に一枚の金貨をカウンターに置いた。他に彼女ができる事はない。

そもそも自分こそがここでは異端者だという事を心得ていた。いや、どこまでいっても自分は異端者なのだ、彼女は絶望していた。

彼女が出て行くと同時に酒場の空気が動き出す。

『城岩落とし』の噂を言い合い、彼女を嘲笑しながらそれぞれの行為に熱中していく。

そんな彼らは、何時の間にか席を立ったエルフの若者の事など、誰も気にする事はなかった。

若者はゆっくりと彼女の跡をつける。森に住まうエルフは生まれながらの狩人だ。

その中でも優秀な狩人と自負する彼は、注意深く彼女の跡を追った。

途中、自分とは別に彼女を追い、町外れで襲おうとした一団がいたが、とうに気づかれている。

五人の男達は彼女の大剣の一閃で全員倒れた。

そのまま行ってしまった彼女に気づかれぬよう、間抜けな襲撃者たちに近寄る。脈はある。皆生きている。

「なんともお優しいっ」

若者は鼻で笑ったが、彼女の恐ろしい剣撃の冴えは見た。接近戦は自殺に等しい。

もともと、狩人である彼は最初から弓矢で勝負するつもりだったが。

裏街道は正規の道ではない。

数百年来、この世界を支配した『天使王国』は完璧な街道網を敷き、人々や荷の行き来を簡便にしたが、百年は持つと言われる完璧な石畳など自然発生的に通じた裏街道に望むのは無理というものだ。

道はやがて森の中の獣道に入る。

かすかな痕跡を頼りに完全武装の姿で歩くのは一苦勞だが、彼女の魔法の鎧は、そういう重さを幾らか軽減しているらしい。疲れる事のない彼女の足は、昼なお暗い森の中を進む。

エルフの若者にとって森は自分の縄張りだ。木から木へと渡る呪文を唱え、つかず離れず彼女を追う。

森の中ほどまで来た時、彼は森を支配する木々の精霊に問うて、この辺りの地理を知った。先回りして潜伏しやすい藪を見つける。そこに潜めば探索の達人でもなければ見つける事は不可能だ。

そこに腰を落ち着けた彼は、とっておきの毒を用意する。巨人でもかすり傷で死にいたる毒だ。いくつかの猛毒を混ぜてつくったもので、これで死ななかつた敵はいない。

姿形は人間の小娘でも、善なる軍神の眷属であるポルメリアは『天使』といわれる別次元の生物に近い。

このテッラムリアと呼ばれる世界で『天使』という存在は架空のものでもなんでもなかった。現実には二百年ほど前までは『天使王国』の支配者だったのだ。

彼らは良心的で公正な支配者だった。

テッラムリアのいかなる生物でもかなわぬ強力な魔力と武器で治安を守り、公正な法を定め、司り、人間を始めとする諸族は彼らの支配を認め、封土を得て平穏に暮らしていた。

しかし二百年前を最後に支配者としての彼らは姿を消した。

この世界も含む多次元世界を研究する一部の魔法使いは、善なる神々の下僕である『天使』たちの軍団が転戦した結果、この世界が彼らにとって手薄になったのだと心得ていたが、多くの人々にとってそれは関係のない事だった。

『天使』たちは諸族が公正なる法に慣れ、自分たちで『善』をなせるだろうと信じ、『天使王国』の統治から離れていったのだ。

しばらくはそれでも平穏な日々が過ぎた。しかし世代が移るに連れて人々の考えは変わる。それも人生の短い諸族の方が早い。法を守るよりも、自分の都合のいいように生きる。

そして他人の事など顧みず、自分さえよければと思うようになるにもさほどの時間はかからなかった。

今となつては『天使王国』の平穏は幻であった。

統治の拠点であった七人の大公は衰退し、各地に封ぜられた公爵、侯爵、伯爵はもちろんの事、都市レベルの統治者であった子爵、男爵、准男爵、

一介の騎士や王国都市の称号を持つ自由都市も己が勢力の拡大と権益の保持に奔走する有様だった。

有体に言えば世は乱世であったのだ。

そんな中、『悪』に染まった支配者を倒すポルメリアの行為は虚しかった。良き支配者がいない訳ではない。しかし恣意的な支配者が多すぎるのだ。倒しても倒しても、後釜に座るのは同じような支配者ばかり。

それでも、ポルメリアはこの巡礼を止める訳にはいかなかった。

何故なら、『悪』を滅ぼす為には彼女が人ではたどり着けない力を授かったのだ。後戻りはできなかった。

薄暗い森の中を歩く彼女は仄かに光っている。善なる軍神の眷属たる証だ。

それは格好の的だった。藪の中でエルフの若者は弓を引き絞る。

彼の毒は天使を殺す。百数十年の昔、単独で飛行していた『天使』をこれで殺した事がある。

今度も効くだろう。エルフといつても森や平和を愛する者もいれば、彼のように面白おかしく生きる事を選ぶ者もいる。

彼にとって『善』なるものは仕留める事が難しい、己の腕試しに格好な獲物でしかなかった。

ポルメリアと呼吸を合わせる。息を吐く。止める。同時に放つ。矢は真っ直ぐに飛び彼女の左脇、鎧の隙間に吸い込まれていった。

完全な不意打ちだ。しかし完璧すぎた。矢を受けたポルメリアが獣道で足を滑らせ、藪の中に転がってしまったほどだ。

若者は密かに舌打ちをした。彼女に毒が回り、完全に身動きが取れない事を確認できなければ近寄る気はない。

ポルメリアの剣の腕を見た。命が惜しければ近付かない事だと彼には解っていた。

だが偶然のなせる恐ろしい技か。探索の達人である彼が見回しても藪の中に転がった彼女の姿は見えなかった。

どうするか？危険を冒して彼女を探す気はない。矢にはたつぷりと巨人殺し、天使殺しの毒が塗ってある。毒が効いているならば早くは動けない。そして解毒しなければ死にいたる。

辺りは急に暗くなってきた。恐らく日没が迫っているのだろう。若者は待つ事にした。エルフは星明りでも見通せるが、闇を見通す力はない。藪に隠れていれば安全なのだ。夜が明けてから動けない、あるいは死体になった彼女を探しても遅くはない。

彼は自分自身の仕事に満足した。

ポルメリアの方は、まったくの不意打ちだった。

左脇に受けた矢の衝撃、思わず踏み外した足元、斜面。全てが彼女に災いをもたらした。

藪の中を転倒し、一転二転と転げる。体調が万全ならば頭を打ったぐらいで意識が朦朧とする事はない。だが毒は強力だ。彼女は急激に自分の体の感覚が失われていくのを知った。転げた先が偶然深い藪であった事だけが彼女の救いだった。

動かそうにも体が動かない事を彼女は知った。

善の軍神の眷属になって以来、自分は毒が効き難い体質になっている事は知っていた。

だから彼女は何かの魔法に捕らわれたのだと理解した。強力な魔法が自分にかけられたと。

そのせいだろうか。藪の中に投げ出された後、彼女は何か光のようなものが自分に迫ってくるのを感じた。

幻覚か？いや、もはや全てが曖昧であり、彼女自身の判断力も失われていった。

結局自分は受け入れるしかないのだ。あの日のように……。高熱を感じながら彼女はそう思った。

自分の人生は、今まで何一つ、自分の思うままにはならなかったのだから。

薄れいく意識の中で、彼女は自分の最後を自覚しながら、それを歓迎していた。

少なくとも孤独で絶望的な戦いからは解放されるのだと、それだけを密かに喜びながら……。

なんだろうか。彼女は真夜中に人々のざわめきで叩き起こされた。

まさか敵襲だろうか。幼いながらも正規のランキン侯騎士団員である彼女は、とりもなおさず寢床から武器を取って外へ出た。

先に起きていた騎士団員たちは一様に北の空を差して不安げな表情を浮かべている。それにつられて彼女も見た。

それは真つ赤に焼けている空だった。最初は山火事なのかと思った。

しかし続いて聞こえた腹に響く咆哮が、不吉な予感を感じさせる。

騎士団員の中には、その咆哮を聞くだけで怖気をふるってしまい、その場にうずくまってしまふ者もいた。

赤い光が一瞬明るく燃えた。それは遠く離れた騎士団の宿営地にも熱波を送るような凄まじい光だった。

後から聞いた事なのだが、遙か北の伯爵領が一つ、巨大な赤い龍と冒険者たちとの戦闘に巻き込まれて滅んだという。

龍はこのテツラムリア最強の生物だ。人々と同じように良きもの、悪しきもの、どちらにもよらぬもの様々だ。紅蓮の炎を操る赤き龍と言えば、人々を食らい、大地を焼き尽くす悪しき龍の一角だ。

巨大な、神にも匹敵するものであれば『天使』の軍団を向こうに回しても戦えるだろう。

北の伯爵領は運悪く、功名心に馳せる冒険者たちと龍の争いに巻き込まれたに違いない。

あの光を目撃しながら、北からの避難民から話を聞いた騎士団の者たちは、誰もがそう納得した。

ただ一人、ポルメリアを除いては。

彼女にはあれが、それ以上の禍々しいものに見えたのだ。

テツラムリアに属するだけの単なる悪しき巨龍が暴れたにしては、被害が大きすぎた。

『天使王国』の一行政区である伯爵領は三つの城塞都市とそれに付随する農村からなる。

極めて広大な地域だ。そのうち都市一つが消滅。他の二つも大火に見舞われ、農村となるとほとんどの村が焼け爛れた。

テツラムリアの龍ならば、こんな念入りな事はしない。

せいぜい都市一つを襲い、人々を食らい、財宝を奪い、殺戮を欲しいままにして去っていく。

龍にとつて人々の営みなどどうでも良いのだ。ただ殺せるだけ殺し、奪えるだけ奪う。

一つの行政区を壊滅させるなど、そんな事はしないし、やらない。

溢れる知性を誇っているが、人々への配慮など考えないのが悪龍なのだ。

自らの力を誇り、人間を始めとする人型の生き物など塵芥としか考えない。

それがどうした事か。己の存在を直視したものを殺すように、念入りに、小さな村々まで焼き尽くすあり様である。

彼女には、それがこの世の者ではない何かに思えた。

そこへ、善なる軍神からの召命である。

『悪』を滅ぼす戦列へ、汝も加わるべし。

神に選ばれし恍惚と自分の疑念に対する導きのような召命。彼女は瞬時に決断した。

「騎士団を抜けるだど？」

最初に相談したのは直属の上司である騎士長、グラムス・ランズベールだった。

彼女にとつては剣の師匠であり父親も同然だった。あまりにも遠い、一度として会った記憶のない実の父親に比べれば、物心付いた時から彼女の面倒を見てくれたランズベールは、実の親以上の存在だった。

「神がそう望まれたのです。私はそれに答えなければなりません」

ランズベールは怪訝そうな顔をしたが、しかし疑つてはいなかった。ポルメリア・ランキンという娘はそういう血筋だったからだ。

ランキン侯爵家というのは、並み居る王国諸侯の中でもよほど毛色が変わっている。

まず侯爵といいながら実際に治めている地方はそれ以上である。

全て辺境に位置するが、領域の広さだけならば公爵領はおろか大公領にも匹敵する。

それだけでなく主体となる侯爵家も他の諸侯とは異なっていた。

政略結婚が常識の諸侯でありながら他国との通婚はした事がなく、全て領域内の有力者の娘を娶っている。

しかも一人二人ではない。

大雑把に言えばランキン侯爵に嫁がせる年齢の娘を持つ領域の有力者たちは、こぞつて侯爵の後宮に娘を嫁がせているのだ。

有力者たちは娘と侯爵との間に男子を望む。侯爵家の世襲は男子のみとランキン侯爵家の家訓に定められているからだ。

その生まれた男子を次代の侯爵につける事ができれば、有力者の一族は侯爵の身内として政治の中枢に参画できるのだ。

多数の娘を娶る侯爵として自分の好色のままに子を孕ませる訳にはいかない。

娘の実家の政治力を図りながら、どの娘と契り、どの娘に子を成すかによって領内の安定が絡んでくるのだ。

これがランキン侯爵領の閥閥政治だった。

複数の有力者たちが女とその子を挟んで駆け引きしている。ランキン侯爵家の血を引かない者は、それだけで不利なのだ。一代の侯爵に数人から十数人の妃がいる。

その各々が一人二人と子を産み、彼らが無事に成長すれば、十人余りの侯爵の子女が誕生する。

その中で次代の侯爵となる可能性があるのは、世継ぎを産まずに侯爵が死ななければたった一人だけである。あとの者たちは自分の才覚によって道を切り開かなければならない。

それでも侯爵の血を引くという事は貴種であり、あらゆる面で優遇される事になる。

ただ、ポルメリアの母だけは事情が違った。母方の実家はディボース。善なる神々に祝福されし神官となるべく定められた家柄だ。一般の人々からすれば聖なる一族である。

ランキン侯爵家はディボース家と通婚する事により神に触れ、神聖を得ると考えられていた。

そしてディボースの血を引く侯爵家の子女は例外なく神託により、仕えるべき神を定められ神官としての人生を歩む。

その中でもポルメリアはまた特殊だった。普通の神託は預けるべき神の名を告げるだけである。

現に彼女の双子の姉、ペルペティアは豊饒の女神の神官となるべく定められた。

だがポルメリアへの神託だけは違った。

『戦士として鍛えられし彼女は、軍神の眷属として神々の戦いに加わらん』

そういわれたのだ。

だから彼女だけは神官ではなく、戦士となるべく騎士団に託されたのだ。

ポルメリアやランズベールにとり彼女の発言は、来るべきものがきたという事であった。

善なる軍神は、彼女に神々の戦いに加われと言われたのだ。

だが理解の仕方が二人は異なった。

ポルメリアは騎士団を離れ自由な神の戦士、いや騎士となり、ランキン侯爵家であろうとなんであろうと、人々に災いをなす『悪』を滅ぼす事が、善の軍神の眷属となる自分に課せられた定めであると感じていた。

一方のランズベールは違う。

あくまでも世俗的である彼はランキン侯爵家の『善』、正義に従い、

侯爵家に仇なすものと戦い侯爵家の為に戦う事こそ『善』であると思っていた。

いずれ年を重ねれば侯爵家の血を引く者として、類稀なる戦士として騎士団を率いる者に彼女はなるだろう。

そうなれば、かつての直属の上司であり剣の師匠である自分にもおこぼれがある。

ランズベールの心にそれがなかったとは言えない。

「騎士団を抜けて、どうやって生きていくのだ。傭兵でもするのか？用心棒の真似事をして善なる軍神の御心にかなうのか？」

ランズベールの問いは、彼女の問いでもあった。だが彼女は決然といった。

「悪しき者どもの財をおすそわけしていただくのは、悪しき行為ではないでしょう」

だが彼女とて、その理屈に納得した訳ではなかった。それは何だ。強盗ではないのか？

ランズベールの心は違っていたかも知れない。だが無言で彼女を見詰める彼の黒い瞳は、彼女の行為を批難しているように見えた。

そのランズベールも先日自分の手にかけて。

そして彼が人々から収奪した富の、もつとも高価なものを奪い、彼女は旅を続けているのだ。

それが強盗や追剥ぎと何処が違うというのか？

彼女の刃に倒れたランズベールの、澱んだ黒い瞳が問い掛ける。お前のその手は、本当に白いかと。

乳白色の我が手を見る。だがそれは今まで倒した敵の血潮で赤黒く濡れている。そうだ。これが私の手なのだ。

私の通ってきた道なのだ。これが私の人生なのだ。

軽くうめいて、彼女は目を覚ました。藪の中から見る森は、やはり薄暗い。いや、平和な小鳥のさえずりさえ聞こえる。

私はどうしたのだろうか。

背中にも顔にも、べつとりと汗がこびりついている。左脇には一本の矢が落ちていた。

それを見て、彼女は自分がどうなったのかを思い出した。

左脇に手をやる。鎧の隙間、衣服に破れ目があるが傷はとうに塞がっている。

おそらく矢には毒が塗ってあったのだろう。そうでなければあんなに苦しい夢を見るはずがない。

苦しい？いや、ただ昔の事を思い出ただけだ。記憶の淵に沈んだ筈の、善なる軍神に仕える喜びに震えていた頃の話。それを責めるランズベールの目も、昔の話だった。『悪』に走った彼を殺したのは、彼女なのだから。

どうやら毒をしのぐ事ができたようだ。自分は運に恵まれている。

毒に動かなくなったところを射手に止めを刺されれば、

いかに高速治療の力を授けられていても彼女は死体となつて転がっていただろう。

足を滑らせ倒れこんだ藪が彼女を隠し、射手を躊躇させたのだろう。

そうだ。自分は死ななかったのだ。

ポルメリアはその事に対して喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか一瞬迷った。しかし戦いへの本能が感傷を拒否した。

相手は彼女を倒したと思い、満足して去つただろうか？彼女にはそう考えられなかった。

用意周到に、彼女に生死を彷徨わせるほど強力な毒を用意している相手だ。

彼女の死体を確認しなければ立ち去る事はないだろう。

では自分は相手を見つけて逆襲に出る事ができるのか？藪の中から全ての悪意を見抜く清冽なる藍色の瞳で辺りを見回す。とてもではないが無理だ。相手は熟練の狩人のようだ。

危険に敏感な獣すら欺く相手の技量をもってすれば、

ただ相手を撃ちさえ撃ち倒す事に徹した彼女が探したところで見つかる筈もない。

どうするのか。

彼女は腰に下げたポーチから干し肉を取り出した。硬い塩漬けの肉を噛み締め、噛み締め、瞳を閉じ彼女は方策を考える。

どうあがいても相手よりも自分が先手を取る事は不可能だ。相手はこちらから見えない場所で観察している。こちらが姿を現せば、すぐさま第二射を放つだろう。相手を見つけるには、その射線を見極めるより他に方法はない。そうであるならば、彼女に取るべき方法は他にはなかった。

噛み締めた肉を飲み下す。毒が完全に抜け去り体力が戻った訳ではないが、こちらから仕掛けなければジリ貧になるのは見えている。

覚悟を決めた彼女は藪の中から立ち上がり、足場のよいところで大剣を抜いた。

自らを囿にして相手を誘うより他にない。彼女はそれで相手の出方を待った。

半分眠りながら夜明けを待っていたエルフの若者は、藪の中を動く音と小鳥の羽ばたきでポルメリアの場所を知った。もはやフードもマントも見につけていない。

スカートのようなサーコートと、その下の鎧だけの姿で、両手に大剣を構え、有名な浮遊盾さえ浮かべずに一本に編み上げた金髪の三つ編みを垂らした小柄な少女が、薄暗い森の中に立っていた。

乳白色の顔は少々青ざめている。しかし足取りも剣を構えた腕にも揺らぎはない。

彼女は眷属たる『天使』を殺すほどの毒にも耐えたという事なのだ。

あきれた体力だが、しかしそれにしても無謀な事だ。初めは彼の位置を知って姿を現したのかと思っただけでそうではないようだ。現に若者のところに撃つてかかる様子はない。ただ正眼で剣を構えているだけだ。

何を考えているのか？若者には解らなかつた。だが彼には好都合だつた。音も立てずに毒を塗った矢を引き絞り、彼はほくそえんだ。

『城砦落とし』は噂通り、いや噂以上の馬鹿だ。しかし俺は好きだぜ。馬鹿は殺しやすいからな。

今度ははずさない。彼女の額に目掛けて矢を放つ。

いかに『天使』以上の馬鹿げた体力を持っていても、脳髓を貫かれればどうしようもない。いい的として出てきてくれた事を寿ぎ、若者は今度こそ必殺の矢を放った。

ところがである。一瞬、彼には何が起きたのか解らなかつた。やや体をずらし、彼女が無造作に剣を振るう。

同時に軽く弾ける音がした。藪の中から一部始終見ていた彼だが、一体何が起こつたのか。それを理解するには時間がかかつた。

あの女、俺が放った矢を撃ち落しやがつたのか！

相手からはこちらが見えていないはずである。射線を追う事などできる筈がない。では勘で叩き落したというのか。

舐めた事をしてくれる。

怒りに駆られて彼は第三射をしようとして、ふと彼女の姿を見直した。

なんだろうか。先程よりも彼女の体がこちらを向いているようではないだろうか？

相手に見られている筈はない。しかし正面から彼女の清冽な藍色の瞳を見て彼はゾツとした。

間違いない。彼女は今の射撃から、僅かに視線に入った射線から、彼女を狙う若者の潜む方向を見定めたのだ。

恐ろしい眼力だ。今初めて若者は心底からポルメリア・ランキンという少女を恐ろしいと思った。普通そんな事ができる筈がない。見えない相手から狙われて、恐怖に震えるのは標的の方ではないか。

だが若者は忘れていた。ポルメリア・ランキンには恐怖はない。あるのは、ただただ冷静な戦う意思ばかりなのだ。

どうするか？藪の中を移動して仕切り直すか？

しかしそれをして相手に見つかるとは限らない。見つかったが最後、ポルメリアに接近される。そうになったら勝ち目はない。ではどうするのか？このまま藪の中から狙撃し続けるのか？

若者は苦笑いを浮かべ決断した。結局はそれしかないのだ。武器を構え向き合ったが最後、相手を殺すまで終わりはない。己の隠蔽能力を信じて、相手の死角から狙い撃ちするしかないのだ。大丈夫、今まで自分の射線を読み取られた事はない。相手は人間の小娘だ。自分はエルフの射手。彼女の生きた年月の十倍以上を狩人として生きてきたのだ。勝つのは自分だ。

自分にそう言い聞かせた彼は、第三射を放った。

確かに彼の矢は正確無比だ。しかしそれが彼の命取りだった。彼女を殺す為に的確に急所を狙う。狙われている場所が解るからポルメリアは防御しやすい。あとは飛んでくる方向と位置を確認すればすむ事だった。

第三射を払いのけると同時に彼女は動いた。それこそ矢のように鋭く、一直線に。今度の射撃で正確な方向をつかんだのだ。位置は解らない。だが接近すれば良いと思った。自分に近付いてくると恐怖を感じれば、相手は隠れ家から出てくる。そこを狙えばいい。

自分が隠れている方へ真っ直ぐにやってくるポルメリアに彼はうろたえた。すぐさま第四射を放つ。だがうろたえ矢などポルメリアには問題ではなかった。払いのけると同時に遅すぎる移動を開始した彼に剣を振るう。

後に飛びのいた彼は、彼女の狙いが最初から自分の弓である事を知った。

小柄な少女に似つかわしくない大剣が一撃で彼の華奢な弓を砕いた。この時点で勝負はついた。

弓を失った弓兵など何の脅威でもない。ポルメリアはそう考えているのだ。だから彼女の清冽な藍色の瞳には殺意がなかった。彼女がこれで終わりだと思っているのが彼には読み取れた。

それを知って彼はほくそえんだ。

大振りな剣を振り切った彼女が次に彼に剣を振るうのと、同じ毒をたっぷり塗ってある腰の短剣を彼が放つのと、どちらが早いのか。

間合いはまだ俺の物だ。俺の勝ちだ！

だがポルメリアの全てを見通す清冽な瞳が、砕けた弓をそうそうに諦め、腰に伸ばした彼の腕を見た。

彼女は何も考えなかった。ただ相手の悪意に反応しただけだった。

彼が短剣を投げるよりも早く彼女は一步踏み込み、返す大剣を彼に振るった。剣は直撃しなかった。

しかし鋭くも巨大な切っ先が彼の喉元をかすめ、喉仏をえぐった。

呼吸を奪われた彼は短剣を投げる事もできず、そのまま地に伏した。

大きく開かれた口が二度と吸い込めぬ大気を求めてうごめき、やがて動かなくなった。

それで全ては終わりだった。

見ず知らず者に狙われる事には慣れてる。今まで多くの者の命を奪ってきたのだ。恐れ疎まれる事はこの三年間日常茶飯事だった。

だが彼女はエルフの若者の顔を見て、一瞬怯んだ。歳は彼女よりも遥かに上であるに違いない。

だが外見だけならば自分とさほど変わらぬいたいけなエルフではないか。

顔を背け、しかしそれでも彼の手荷物を探る。金貨や彼女の事を書いた手配書を手に入れると、エルフの若者の為に墓穴を掘る。何をやっているのだろう、私は。こんな事をして自分の良心を誤魔化しているだけだ。私はただの追剥ぎと変わらない。そうやって生きてきたのだ。そして、これからも……。

自分に襲い掛かる『悪』を殺し、人々に害をなす『悪』を滅ぼし、その財貨を奪って生きている。

『善』も『悪』も同じ穴の貉だ。

しかし、例えそうであるとしても、彼女は善なる軍神の眷属。『悪』を討ち滅ぼす為に、その剣を振るい続けなければならない。それが不毛な、闇の中の行為であるとしても。

自分を狙ったエルフの若者を葬ると、彼女は旅を続けた。

数日後、一人の邪悪な魔法使いが滅ぼされたが、だからといって何が変わるという訳でもなかった。彼女が二つ名に相応しい力を世に示し、人々の賞賛と侮蔑をより多く受けるようになったに過ぎない。

彼女の名はボルメリア・ランキン。

またの名を『城砦落とし』。

畏怖と嘲笑にまみれて。